

ユニセフ 子ども ネット ニュース

2003 冬 No.7 アフリカ特集号

発行者 ユニセフ子どもネット事務局 財団法人 日本ユニセフ協会 広報室 〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12 ユニセフハウス
 電話: 03-5789-2016 ファックス: 03-5789-2036 電子メール: jcuinfo@unicef.or.jp

ユニセフ TOPICS

エイズ孤児についてのレポート発表

11月26日、ユニセフは、HIV/エイズによって親を失い孤児になった子どもたちについてまとめたレポートを発表しました。これによると、サハラ以南のアフリカの国々で、HIV/エイズのために片方の親が両親をなくした子どもは1990年には、100万人よりも少なかったのですが、2001年の末には、1,100万人にまで増えました。エイズ孤児の10人のうち8人はサハラ砂漠より南のアフリカで暮らす子どもたちです。子どもたちは、親の病気の苦しみや亡くなるのを見てショックを受けているだけでなく、他の子どもたちよりも貧しい生活をしいられます。栄養も十分にではなく、保健のサービスも受け



られないので、健康状態が悪く、他の子どもより学校に行けない割合がずっと高くなっています。エイズ孤児の数は、2010年までに2,000万人にまで増えると予想されていて、レポートは、最悪の状態はこれから来ると警告しています。一刻でも早く孤児を守るために、家族や親せきの輪を広げ、コミュニティも一緒に子どもたちを育てていける力を強めなければなりません。そして、孤児たちが保健や教育のサービスを受け、差別を受けなくすむようにしなければなりません。レポートは、こうした子どもの権利を守るために、国が最終的な責任を持たなければならないとうたっていています。

各地で予防接種が成功

ポリオやはしかの予防接種が各地で成功しています。ギニアでは、11月に生後6ヶ月から14歳の子ども350万人に、はしかの予防接種がおこなわれました。また、10月には、ポリオの予防接種も大々的におこなわれました。ナイジェリアでは1,500万人、エチオピアでは210万人、スリランカ北部では50万人以上の子どもにポリオワクチンが与えられ、ベニンやブルキナファソ、ニジェール、トーゴでもすべての子ども



を対象にポリオの予防接種がおこなわれました。また、ウガンダでは、ユニセフやWHO(世界保健機関)などが、10月14~21日に、はしかの予防接種をおこなうために戦争をいったん停めるよう求めました。

戦争の中の子どもたちについて国連がレポートを発表

国連は、戦争の中の子どもたちについて新しいレポートを発表しました。レポートは、いまだに世界中で、戦争のために子どもたちが殺され、孤児になり、障害を負い、誘拐され、教育や保健のチャンスがうばわれ、心に深い傷を受け、家を追われ、難民や避難民になり、薬物をふるわれ、兵士にさせられ、病気や栄養不良になっているとうたえました。コロンビアでは、戦争で家を追われた子どもたちの多くがストリートチルドレンになり、ときに「社会をきれいにする」という理由で殺されることさえあります。パレスチナでは、2000年9月か

ら400人以上のパレスチナ人の子どもと100人のイスラエル人の子どもが亡くなりました。戦争の起きている地域のダイヤモンドや金の鉱山で、ひどい仕事をさせられている子どもたちもいます。アンゴラやシエラレオネ、リベリアなどでこうして子どもたちが生み出す資源は、戦争を続けたり、銃や武器を売り買いたるための資金源になっています。最近では、子どもたちの誘拐が増えています。誘拐された子どもは、働かされたり、兵士にさせられたりしています。レポートは、子どもの兵士の解放がはじまっている一方で、アフガニスタン、ブルンジ、コートジボワール、コンゴ民主共和国、リベリア、ソマリア、コロンビア、ミャンマー、ネパール、北アイルランド、フィリピン、スリランカ、スーダン、ウガンダで、子どもを兵士として使っている勢力があることを指摘し、リストとしてその勢力の名前まで発表しました。

STORY みんながザカリアスくんのように……

長い戦争が終わったアンゴラでは、ユニセフや政府が呼びかけたバックトゥースクール(学校にもどろう)キャンペーンで、たくさん子どもたちが学校にもどってきました。14歳のザカリアスくんもそのひとりです。感情ゆたかな、笑顔のすてきな少年です。ザカリアスくんも、ほかの多くの子どもと同じで、家族といっしょに戦争からにげまどっている間、一度も学校に通ったことはありませんでした。「今まででいちばんすごいことだよ! 父さんと畑仕事をするのも好きだけど、仕事の前にもっと勉強したいのよ!」ザカリアスくんの声は、はすんでいます。「兄さんは、銃のうちはあいで殺されたんだ。だからぼくはもっとはたらかないといけない…。でも、今はこの村からにげなくてもすむし、学校にも行けるよ。すごいよ!」

ザカリアスくんは14歳ですが小学校1年生の勉強からはじめています。そして、教室も子どもたちが多すぎて、すづめです。

「でも、ぼくはうれいしんだ。はたらくのも大事だけど、それだけじゃだめだと思っ。ぼくは、いろいろおぼえるのが得意なんだ。学校から帰って途中、習ったことを復習しているんだ!」

ようやく学校にもどれたザカリアスくん。でも、まだ世界には、戦争のために学校にもどれない子どもたちがいます…。



もくじ

- ⇒ ユニセフ TOPICS 1
- ⇒ ユニセフ・アフリカ・ミーティング「今、アフリカで起きていること」報告 ~ニュースからは見えないアフリカを感じた日~ 2-3
- ⇒ 写真で見る世界の子どもたちのようす~アフリカの子どもたち ユニセフ紙上写真展 4-5
- ⇒ ユニセフ子どもネットメーリングリスト ユニセフ現地スタッフ 兼光さんにインタビュー! 6-7
- ⇒ REPORT&INFORMATION (報告とお知らせ) 8

ユニセフ・アフリカ・ミーティング

今、アフリカで起きていること

ニュースからは見えないアフリカを感じた日



10 中東・北アフリカ地域事務所



9月29日にひらかれたユニセフ・アフリカ・ミーティングには、アフリカで働く日本人のユニセフのスタッフが13人も集まりました。日本ユニセフ協会大使のアグネス・チャンさんが司会をし、アフリカ13か国のようすが次から次へと話されました。会場には、およそ1,500人が集まりました。アフリカの問題に関心が集まりはじめているようです。

アグネス・チャンさんからのメッセージ
1985年にエチオピアで見たことを一生忘れられません。当時、干ばつと内戦で人々は飢え、骨と皮しかない人がさまよっていました。食料の配給にきたトラックから落ちた妻をひろいあつめて、砂でも妻でもかまわずに



じゃりじゃり食べる子どもたち。その子どもたちは、踊って私を歓迎してくれました。子どもたちと出会い、目の前で人が亡くなって、私の人生も変わりました。アフリカは遠いけれど、私たちと同じ一生懸命生きている人がいることを実感しました。

ユニセフ事務局長のキャロル・ベラミーさんも飛び入りであいさつ!
アフリカの子どもたちがきびしい生活をしていることは本当です。子どもが亡くなる割合がとても高く、HIV/エイズやマラリアの問題も大きいです。特に女の子たちが学校に



行けない、ここにいるスタッフは日々こうした問題とたたかっています。彼らは、アフリカにはどのような可能性や問題があるのかを話してくれるでしょう。ミーティングの後、みなさんも同じように彼らのことを誇りに思ってくれることと思います。



スタッフからのレポート



1 釜土 真帆子さん (ユニセフ・コンゴ民主共和国事務所) 何も無い国にも、お母さんのお乳はある!

コンゴ民主共和国は、戦争があり、貧しい国です。その中で、たとえば、子どもの栄養をどうよくしていくか。ユニセフは、生まれてから6か月は母乳だけで育てるようすすめています。村に行くと、母乳育児を知っているお母さんの赤ちゃんはまるまると健康です。コンゴは何もない国ですが、母乳で子どもを健康に育てることができるのです。6ヵ月後の赤ちゃんには、病気をたたく力を強めるためにビタミンAを与えます。遠いところまで視察に行きましたが、ちゃんとそのビタミンは届いています。子どもたちは、口に落とすのを待ちたくして、遊びのようにして受け入れています。ユニセフは、ビタミンなどを飛行機、車、バイクを使って1,100万人の子どもに届けているのです。



2 西垣 洋子さん (ユニセフ・ソマリア事務所) 平和をつくるには、子どもが平和を知ることから

ソマリアは10年以上内戦が続く国です。15、16歳の少年が銃を持って地域を守っているのを見たとき、「本当に平和が必要だ」と感じました。平和作りのためには、平和を大切に思い、互いのちがいを大事にできる人が育つことが大切です。2年前、ユニセフが率先して20年ぶりに小学校の教科書をつくりなおしました。教科書には、たとえば、都市や農村、遊牧、漁業などいろいろな生活が描かれました。学校に通えなかった若者のためのプログラムでは、ケンカではなく他の方法で解決する力をつけられるようにしています。先生が偏見を持っていたり、力で子どもを従わせようすると、子どももそれをまねるので、先生のトレーニングもします。将菜、ソマリアが平和になって、「今の活動が実を結んだ」と思える日を楽しみに活動しています。



3 秋山 直子さん (ユニセフ・タンザニア事務所) 本国の戦争にまきこまれる難民の子どもたち

タンザニアは、東アフリカでたたびと戦争のない国ですが、戦争をしている国にこまれていて、長い間、多くの難民(戦争や災害から国をこえて逃げたひと)を受け入れています。今もブルンジやコンゴ民主共和国から50万人(うち20万人は子ども)の難民が逃げてきています。去年の末、ブルンジ難民の子どもたちが学校をやめ、キャンプを出ているという情報がありました。調べると、出席簿では学校に来ているはずの子ども数百人がいないことがわかりました。そのころブルンジでは、政府と政府に反対する軍が和平協定(戦争を終えるための約束)を結ぶ準備を進めていたが、その前に自分たちの領土を増やそうとして戦艦がはげくなり、子どもたちが兵士として集められていたのです。これでは、学校に通えない子どもが兵士にさせられることが知られていましたが、今回はキャンプの小学校や中学校に通っていた子どももですが、本国に帰って戦争に参加していました。

Q 子どもが兵士として本国に帰るのは子どもの意志ですか?

A. 子どもたちは「国が君たちを必要としている」と言われてしまうと、納得してしまいます。子どもたちは、たとえ幼いときのことでも、家族が殺されているのを見ていたりして、戦争が記憶に残っています。12歳くらいになって、自分は子どもではないと感じ、自分を必要としていると思うと、(戦争に)行ってしまいます。一見、子どもの意志で行っているようでも、結局はおとなに利用されているので、ユニセフは、子どもの意志だからほうっておいてよいとは思えません。



4 西本 伴子さん (ユニセフ・ザンビア事務所 副代表) 魅力あふれるアフリカ問題をかかえるアフリカ

ムリボンワジ! ザンビアの部族語キランジャで「こんにちは」です。アフリカには自然の美しさ、多彩な文化があり、限りなくカラフルな大陸です。近代化が進んでいて、アフリカの都市は日本と変わりません。天然資源も豊かで、ダイヤモンド、金など多くのものがとれます。しかし、問題があるのも事実です。ユニセフの活動用のお金の半分はアフリカにつきこまれていて、ユニセフのスタッフは10人いれば4人が、アフリカで働いています。特にHIV/エイズは深刻です。1980年代中ごろからエイズで亡くなった人は、戦争で亡くなった人の10倍です。亡くなる人は、父や母であり、先生、農民、エンジニア、医者、看護師でもあります。こうした人がなくなり、あらゆるところで危機が起きているのです。アフリカの伝統では、孤児は親せきが育てますが、病気にうつりたくないなどと差別を受け、親せきを転々とするうちに、ストリートチルドレンになったりしてしまいます。

Q 日本がアフリカから学ぶことは何でしょう?

A. お母さんがエイズで亡くなり、いろいろな家庭をたらいまわしにされて、孤児院に入ったある女の子がいます。彼女は、ユニセフの活動で体験を話してくれるようになりました。その子が話すととても説得力があります。でも、話し終わるといつもワッと泣いてしまうので、「かわいそうで仕方ないからもういいよ」と言うと、「私が話して、お母さんみたいに死ぬ人がいなくなるなら、私のような子どもがへるなら、もっと話す」と言うのです。日本にはいっぱいモノがあるのに、人と分け合うとか人を助けるということが忘れられています。アフリカでは、悲しみをいっぱい知った人、何も無いびとが、たった11歳の子どもですけれど、それでもほかの人を助けたいと言うのです。
※エイズは後天性免疫不全症候群という病気のことで、HIVはその病気をひきおこすウイルスです。まだ治す方法はありません。くわしくはユニセフ子どもネットニュースNo.2を読んでね。



5 平良 佳音子さん (ユニセフ・ウガンダ事務所) 地域がいっしょになって子どもを育てるしくみづくり

ウガンダは、お金を注ぎこめばきちんと成果を出す優等生の国といわれています。たとえば、1992年のHIV感染の割合は30パーセントでしたが、今では6.5パーセントにまで下がっています。でも、ある村で、ひとりの女性が言いました。「データが何? 私の子どもは感染して亡くなりました。私には100パーセント以上の悲しみです」。この言葉を胸にきかえています。今、親、村、政府と協力して、子どもの健康や栄養を守り、教育を受けられる総合センターをコミュニティをつくるプログラムを進めています。トレーニングを受けたスタッフが、子育てにかんする住民の考えや習慣などの良い面を調査し、住民の考えを取り入れながらセンターを作ります。センターで実現したことのひとつに遊びの時間があります。親たちが、家の手伝いで遊びの時間がない女の子も、男の子と同じように遊びの時間をとくろうと考えたのです。このような取り組みが広がっています。

※写真©日本ユニセフ協会/Shindo

スタッフからのレポート

6 名取 郁子さん (ユニセフ・アンゴラ事務所)
世界で3番目に子どもが亡くなる国でのユニセフの活動

ユニセフは、アンゴラで、戦争で逃げた子どもたちを普通の生活にもどすために、「バック・トゥ・スクール(学校にもどろう)キャンペーン」をおこなっています。ユニセフが教材を届け、教育省が先生を増やして各校に送り、25万人の子どもの学校に通えるようになりました。9歳になって1年生になれたジョゼント君は、内戦中ゲリラに村が攻撃されて、家族と村を追われ、2歳の弟を殺された経験があります。学校に行けなかったおとも勝ちにイブを持ってきて、屋根しかない学校で一緒に授業を聞いていたのですが、それもいけません。また、予防接種も大きな事業です。ワクチンは暑さに弱く、冷凍ボックスに入れて運びます。地雷があったり、道路がなかったり、ワクチンを運ぶのは大変ですが、子どもたちも受けたいと冷凍ボックスをかかっています。はしかの予防接種キャンペーンでは、700万人の子どもが予防接種を受けました。

7 大窪 さおりさん (ユニセフ・ガーナ事務所)
赤ちゃんや幼い子どもの環境を守る

ガーナでの問題のひとつは、赤ちゃんや幼い子どもの環境の厳しさです。たとえ、市場で働く女性たちが子どもをあずけている託児所は、衛生の状態も悪く、子どもたちの顔にハエがたかっています。栄養不良のためにお腹がふくらみ、細いうでをしている子どももいました。そんな中、世話をしている人たちが、ユニセフなどに働きかけてひとつのプロジェクトがはじまりました。最初、選ばれた託児所に、バケツ、タオル、せっけんなどが届けられ、子どもの世話をする人や母親たちに衛生についてのワークショップがひかれるようになりました。特に評判が良かったのが、月に一度の子どもの権利について学ぶ集まりです。おしゃべり、出生登録の大切さなどのメッセージを伝えています。だんだん、子どもたちの環境はよくなって、この前、同じ託児所を訪ねたときには、子どもたちは歌を歌っていました。

8 大井 佳子さん (ユニセフ・スワジランド事務所)
エイズで親を失った孤児を守る努力

スワジランドでは3人にひとりHIVに感染していて、職場でも毎週スタッフのどれかの親せきのお葬式があります。親を失った子どもだけの家族もたくさん見かけます。15歳の女の子セボナは、メイドとして月に1,000円の給料で働き、6人の子どもの面倒を見ています。給料は食べ物でなくなってしまい、学校には行きません。ユニセフはケアセンターを作ったり、空き地を畑にしてそこから食べ物をとれるようにしたりしています。孤児は性的な被害にあうこともあります。ある時、ひとりの女性が、夫が孤児としてもかえた女の手に乱暴していると話してきました。でも、それを警察に言う、夫が連れていかれて、自分たちは生きていけないと言います。スワジランドでは女性は遺産を持っていないという法律があり、夫がいなくなると女性は生活できないのです。そのときは、村が家族を支えるという話し合いをして警察に届け、その夫はつかまりました。

9 大澤 祐子さん (ユニセフ・エジプト事務所)
古代からの悪習“女性性器切除”とたたかう

エジプトはピラミッドなどのイメージが強いと思いますが、今回はファラオの時代からの問題である“FGM”(女性の性器を切りとる風習。手術のせいで命を失ったり、一生苦しむ女性が多い)を紹介します。アフリカの28か国以上で、毎年2,000万人が受けていると言われるFGMは、女の子の性的な純潔を守るためのものと言われて、エジプトではほとんどの女性がFGMを受けています。ユニセフは、これをなくす活動に取り組みしていて、エジプトでは若者による反対活動もおこなわれています。15歳のサルマちゃんは11歳のときに、お母さんとおばあさんに体を押さえられてFGMを受けました。誤解しないでほしいのは、それは、FGMをしない結婚できないという親の愛情からなのです。サルマちゃんも女に生まれた義務として苦しみを乗り越えようとしていましたが、妹のマルちゃんもFGMのために12歳で亡くなったことから、この伝統に疑問を持ち、今では、反対活動に活躍しています。

10 兼光 由美子さん (ユニセフ・中東/北アフリカ地域事務所)
北アフリカの子どもの課題

私の事務所できりまとめている北アフリカの7か国は、ほとんどがイスラム教の国で、アラビア語が公用語です。中近東や北アフリカ地域に紛争が蔓延しているのは事実です。若い人に将来の夢を聞くと、欧米に移住したいと答えます。海外への好奇心が強いというより、自分の国に仕事がないという理由からです。若い人が自分の国や将来に希望を持っていないことがこの地域の一番の問題ではないかと思えます。子どもたちの社会参加が少ないことも共通の課題です。クラブ活動やスポーツにもあまり参加しません。おとも子どもが社会に参加することをあまり大切に思わず、学校はつめこみです。男女を分ける社会で、女性が教育を受けても仕事につくチャンスはあまりありません。でも、最近ではエイズや女性器切除問題(FGM)も語られるようになってきました。社会がゆっくり変化していると感じます。

11 富田 真紀さん (ユニセフ・マラウイ事務所)
ひとりでも多くの子どもにきちんとした学校を!

マラウイでは、1988年に48歳だった平均寿命が、2000年には39歳に下がり、毎日139人の人が亡くなっています。孤児は47万人もいます。これはすべてHIV/エイズのためです。1994年に小学校が無料になり、小学生が190万人から300万人近く増えました。しかし、国のお金が足りません。飯の教室では、わらふき屋根に木の柱だけを立てて、生徒が地べたに座っています。雨が教室の中まで入ってくるので、とても勉強できるような環境とは思えません。でも、子どもたちに「学校は好き?」と聞くと、みんな目をキラキラさせて「勉強するのは楽しい」「もっと勉強したい」と言います。ユニセフが届けられた教材の入ったがばんを大事そうにほこらげに持っている子どもたちを見ると、あきらめずにやっつけていかなければ、と思います。

12 斎藤 鈴恵さん (ユニセフ・モザンビーク事務所)
内臓まで…。ひどい虐待の現実

モザンビークでも孤児が性的搾取の犠牲になる問題が起こっています。4歳のエルマナちゃん(仮名)は、おじいさん、おばあさん、お兄さん、お姉さんと暮らしていました。両親は南アフリカに出稼ぎに行ったまま行方不明で、おじいさんのほんの少しの収入で暮らしていました。ある晩、ひとりの男が怒りこんできて、エルマナちゃんをさらしました。村はずれの小屋に連れこんで逃げようとするエルマナちゃんを何度も乱暴しました。男は、気を失ったエルマナちゃんの性器を切りひらいて内臓を取ろうとしたが、気づいた村人がエルマナちゃんを救い出しました。1年前にも同じような事件があり、その時は、内臓も取られてしまった子どもは亡くなりました。内臓は、先進国の臓器移植のために売買されていると考えられています。犯人はつかまっています。こんな悲惨な話を通して、アフリカの問題解決をどうして急がなければならぬかをわかってほしいと思います。

13 菊川 稔さん (ユニセフ・エリトリア事務所)
“子ども参加”が明るい未来へのきざし

大変な状況にあるアフリカでも、日本でもできないような前向きな活動がある例を紹介します。この前まで私が働いていたレソトでは、子どもの性的虐待を防ぐための法律に、性的搾取の問題がふくまれていませんでした。政府は法律をあらためる作業を進めていて、この作業に、子どもたちが積極的に関わっているのです。子どもたちは、委員会で意見を言うだけでなく、村へ行って劇をして、今の法律ではこういう犯罪が起こったときに子どもたちを守れない、なぜ変えなければならぬかを説明します。すると、それを見た村人たちがいろんな意見を言い、今度は、それを子どもたちが委員会に伝えます。これはすごい活動です。また、エリトリアは、エチオピアから独立する前に30年戦争をしていて、最近も国境紛争が終わらず、国じゅうに地雷があります。この問題について、子どもたちが積極的に地雷の危険を知らせるキャンペーンをおこなったという例もあります。

Column コラム アグネスさん、サンコンさん、ゾマホンさんがアフリカへの支援をよびかけ

9月22日、品川駅南ふれあい広場に、アフリカの民族衣装を着たアグネスさんと、テレビなどで活躍しているギニア出身のサンコンさん、ベニン出身のゾマホンさんが集まりました。アフリカン・バンドの演奏もあり、多くの人が集まる中、3人は、「アフリカの問題を解決しなければ、世界の問題は解決しない」とうたったえました。アフリカ各国に届けられている教材セットなども展示され、1日ユニセフ教室が出現しました。



©日本ユニセフ協会/Shindo

感想

参加したネットワーカーから感想

わたしもアフリカミーティング行きました。厳しい現状だけでなく、本当はアフリカの自然ってすごく素敵なんだってあってびっくりした。西本さんの話がとて印象的でした。
“なんなんだろう、この世界の格差は。豊かな国(国)はどこも豊かで、貧しい(国)はどこも貧しい。”いつも思う。なんだか悲しくなりますね。どうしてこんなことが起こるのか。理由は何かと思いませんが?たくさんの方が努力しているのになかなかその差が埋められない理由はいったい何なのでしょう。 (中津川 有紀 17歳)



最近、イラクなどが話題だったせいか、アフリカの入ったことを忘れていました。でも、アフリカ・ミーティングでアフリカの状況のひどさを思い出しました。今、援助を受けている国ぐにいろいろあるけれど、もっとアフリカに多くの助けが必要。そして、もっと多くの人に、アフリカの現状を知らなければならぬと思います。アフリカの仲の、あるひとつの国で起きている問題は、近隣の国へも難民などによって広がってしまっ。だから、アフリカ全体の平和を目指すべきが大切ですね。たとえば植民地化した国がひいた現在の国境ではなく、民族の分布を考えた国境によって、国を作りなおすなど。お話の中で、自然は豊かなのに内戦続きで何などかかわらず、アフリカ人の平均寿命が短くなっている、ということが印象に残りました。 (今関 美都 13歳)

写真で見る世界の子どもたちのようす

アフリカの子どもたち ユニセフ紙上写真展

今年9月末に、東京でひらかれた「第3回アフリカ開発会議」という大きな国際会議をきっかけに、ユニセフハウスでは、「今、アフリカで起きていること」という展示がおこなわれています。今回は、そこで展示されている写真を中心に、今のアフリカの子どもたちのようすを伝える、いろいろな写真をご紹介します。この号でもアフリカの話題を取り上げていますが、写真ではどんなことが見えてくるでしょう？

※ユニセフハウスでのユニセフ展「今、アフリカで起きていること」は2004年1月末までひらかれています。その後、全国各地でひらかれる予定です。

ケニア

はしかの予防接種を受ける子ども。2002年6月にケニアで行われたはしかの全国予防接種デーでは、生後9か月から14歳までの子ども、およそ1,400万人が予防接種を受けました。はしかが流行しないようにするには、予防接種の割合を95%以上にまで高めなければなりません。

©UNICEF/HQ02-0245/Thierry Geenan



ポリオのワクチン2滴が子どもの口に落とされます。ポリオの予防接種は注射ではなく、口からワクチンを入れてもらいます。戦争が長くつづくコンゴ民主共和国でも、2000年に、1,100万人の子どもを対象に大きなポリオ予防接種キャンペーンがおこなわれました。予防接種員は、一軒一軒をまわって、予防接種を受けていない子どもがいなくどうかを確認しました。

©UNICEF/HQ00-0675/Radhika Chalasani

コンゴ民主共和国



アンゴラ

予防接種用のポリオのワクチンを運ぶ予防接種員。遠い村の子どもたちにもワクチンを届けるため、アフリカ各国で、山や川を越え、多くの人がびとが協力しています。

©UNICEF Angola



スーダン



元子ども兵士だった子どもたち。解放され、保護キャンプに向かいます。スーダンでは、北部の政府と南部の政府に反対する勢力が戦争をつづけ、多くの子どもたちが兵士として使われています。解放されても、親のもとや住んでいた村に帰るのがむずかしい子どもも多いのです。保護キャンプでは、平和な生活にもどるためのさまざまなプログラムをおこない、帰るところのない子どもたちも教育を受けたり、社会で暮らしたりできるように手助けしています。

©UNICEF/Sudan



ザンビア

マラリアを防ぐ蚊帳を広げる家族。全世界でマラリアで亡くなる人は年間100〜300万人。その90%はサハラ砂漠より南のアフリカの人びとで、アフリカ全体では、マラリアで30秒にひとりの子どもが亡くなっています。マラリアのワクチンはまだ開発されていません。病気のもとを運ぶ蚊に刺されないように、蚊帳を使うことがもっともよい予防法です。ユニセフは、安く手に入り、手入れがかんたんな蚊帳を広めています。

©UNICEF Zambia



ブルキナファソ

子ども国会で発言する子ども議員。ブルキナファソの子ども国会には、各地の地方子ども議会議員代表100人（男女50ずつ）が集まります。ここで話し合われたことは、国の政策を決めるおとなたちに直接伝えられています。

©UNICEF WCAR/Kent Page

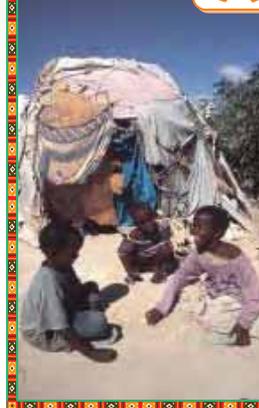


シエラレオネ
ブルキナファソ
コートジボワール

戦争からにげてきた避難民が暮らすキャンプで暮らす子どもたち。12年も政府がないままのソマリアでは、各地で氏族と呼ばれる勢力どうしの争いがつづいて、国全体が避難民キャンプのようになっています。

©UNICEF/Somalia-8/Pirozzi

ソマリア





エラレオネ

キャンプにある学校で、戦争のときの話し合う子どもたち。棒を鏡に見たてて、少年が撃ち合いをしていたようすをみんな見えています。つらい思い出を心の外に出すのが、心の傷をなおすことにつながります。

F/HQ01-0140/Roger Lemoine

再開された小学校で学ぶ子どもたち。内戦によって多くの学校がこわされてしまいましたが、親やコミュニティがお金を出し合い、小学校をつくって、学校をもう一度はじめるという努力をつけています。

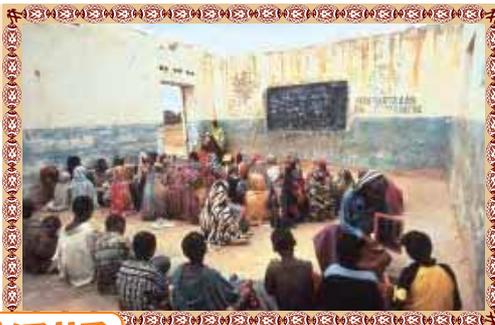
©UNICEF/HQ00-0478/Radhica Chalasani



ソマリア

男の子と女の子の間の不平等が大きいところでは、女の子を学校に通わせるための苦労も大きいものです。しかし、いったん女の子が学校に行けるようになると、そのことが地域や社会に大きな変化をもたらします。

©日本ユニセフ協会/Mizuguchi



モスマ地域のユースセンターの開所式で、おしほいをしてHIV/エイスの知識を広める若者たち。娘をエイズで亡くして泣きさけぶ母親を演じるのは17歳の少女。ユニセフは、若者自身がHIV/エイスを防ぐ知識を学んだり、伝え合ったりする活動を応援しています。

©UNICEF/HQ00-0316/Roger Lemoine



タンザニア



ジンバブエ

女性ボランティアのカウンセリングを受けるお母さんと娘。41歳のお母さんはすでにエイズを発病して、はたらくことができず。かたわらで13歳の娘がメモを取りながら話を聞いています。この女の子は、学校の費用が払えないために、学校には通っていません。

©UNICEF/HQ02-0315/Giacomo Pirozzi



ボツワナ

ラジオ番組を通じて、HIV/エイスの予防についての話を中学生。たくさんのお母さんがかかえるアフリカ各国では、問題の解決や知識を広める活動に子どもや若者自身が積極的に参加している例がどんどん増えています。

©UNICEF/HQ01-0198/Giacomo Pirozzi

モザンビーク

洪水のために避難してきた4万人が暮らすキャンプの中の水場に集まる女性や子どもたち。こうしたキャンプでは、子どもを病気や死から守るために、安全な水がもっとも大切です。

©UNICEF/HQ0-0157/Giacomo Pirozzi



スーダン

戦争がつかぬか、地雷で足を失った子どもたち。

©日本ユニセフ協会/Shindo

アンゴラ

戦争や地雷について教えてもらう子どもたち。アフリカには、戦争のために地雷や不発弾がたくさん残っていて、多くの子どもたちが犠牲にあっています。地雷を見たときにどうしたらいいかを小さいときからしっかり知っておくことが大切です。

ICEF Angola

2002年に起こったクーデターから、まだ政治や社会が安定していないコートジボワールでは、100万人の子どもたちが学校に行けなくなってしまいました。今、その子どもたちを危険から守り、学校にもどるようになるための活動がつけられています。

©UNICEF WCAR/Kent Page

コートジボワール



ジンバブエ

干ばつ（雨がふらず大地がかわきまわってしまい、作物もつれなくなってしまうこと）のためにはたてたもうろこし畑にたたく男の子。アフリカ南部の国々には、干ばつが広がって食糧が不足しています。また、HIV/エイスが広がって、はたらきかたの人がたくさん亡くなっているために、働きから立ち直ることがむずかしくなっています。

©UNICEF/HQ02-0297/Giacomo Pirozzi



ユニセフ子どもネット + 1年バングリスト

インタビュー企画 第2弾

ユニセフ現地スタッフ 兼光さんにインタビュー!



みなさんこんにちは! 若手県に住むネットワークワーカの鈴木です。10月20日から11月3日までのあいだ、メーリングリストを使ってユニセフ現地事務所のスタッフにインタビューをしました。今回は、ユニセフ中東・北アフリカ地域事務所の兼光さんが、みんなの質問に答えてくれました。楽しいインタビューだったので、みなさんにもご報告します!

©UNICEF/Kanemitsu

兼光 由美子さんからのメッセージ

みなさん、サラマライコム。アラビア語で「こんにちは」という意味です。この返事には、「アレイコム、サラーム」と答えます。私は中東にあるヨルダンという国の首都、アンマンに住んでおります。え? それ、どこ? という人が多いのではないかと思いますので、ぜひ地図を確認してみてください。西はイスラエル、北はシリア、南は紅海、東はイラクとサウジアラビアにかこまれた小さな国です。どうですか? 見つかりましたか?

日本では中東といえば、よくないニュースばかりが流れるので、とてもこわいところというイメージがあるのではないかと思います、けれどもそんなことはないです。今回はぜひ「こわくない中東」をみなさんにお伝えできれば、と思っています。

私は現在ユニセフの中東・北アフリカ地域事務所に勤めています。仕事の内容はプログラム準備なのですが、地域事務所に勤めているため、東はイラクから西はモロッコまでの20カ国の活動のまとめ役をしていて、ほんとうにいろいろなことをやる(やらされる?)毎日です。しかしいろいろなところにも行け、たくさんの人に会い、多くのことを学ぶことができるのでとても充実しています。

仕事以外では、サッカーチームに入ってフォワードをやっています。それから、中東音楽が好きでCDを買ったり、コンサートに出かけたりしています。そして、ヨルダンを渡る前に、ぜひヘリダナス(アラブ諸国に古くから伝わる民族舞踊)だけは習っておきたいと思っています。

それではみなさん、アラブワールドへ「アハラン ウ サハラン!」(アラビア語で「ようこそ」という意味です)

プロフィール

兼光 由美子

広島県出身。海にかこまれマリンスポーツをしながら育つ。ちなみに高校時代はヨット部。大学は東京に出たが都会生活があわず、大学を出るとすぐに海外放浪生活に入り、気がついたら開発業(開発途上国の人びとのために働くこと)に足をつこんでいた。ヨーロッパ、アフリカなど住んだことのある国は8カ国、旅行で行った国は数知れず。現在はユニセフ中東・北アフリカ地域事務所に勤め、ヨルダンを中心に中東・北アフリカ各国を探索中。趣味はサッカーだが、ヨルダンにきてからこっているのは中東音楽を集めること。自分でいうのもなんだがなかなかいいわい。



シリアのハマというところを旅行しているときに、お父さんと一緒にモスクから出てきた男の子がかわいかったのでお願ひして撮らせてもらいました。ハマは大きな水車がある街でたくさんの子どもたちが川で泳いでいました。

この2枚の写真に写っているのは、ヨルダンのスタッフの子どもたちです。この前、久しぶりに会ったらすっかり大きくなっていて、子どもたちの成長が早いのに驚きました。



©UNICEF/Kanemitsu



ヨルダンのアンマンにある学校で学ぶ男の子
©UNICEF/F. Fontes Abrantes



水たまりから、生活に必要な水をくみ取るイラクの女の子
©日本ユニセフ協会/K. Shindo

兼光さんのプロフィールを見て、とても深い「信念」を感じました。その「信念」が、なぜユニセフ職員になることと結びついたのですか? (鈴木 智瑛 15歳)

真刻に「自分が本当に信念があるのか」ということを思い悩んでみました。そして出した結論は、もし私に信念のようなものがあるとすると、「世界を知り、楽しむこと」ではないかと思いました。

「世界を知り、楽しむこと」というのは、いろいろな人に会い、さまざまな経験をし、自分がこれまでに頭の上から作り上げてきた枠組みや壁のようなものを壊してしまっても、その経験のひとつひとつを楽しもうということ。これを信念といえるかどうかはわかりませんが、私の人生のモットー(目標)です。

ユニセフの仕事をするまでいろいろな職場を経験しているのですが、結局ユニセフが一番私の人生のモットーに合う環境を提供してくれているのです。ユニセフで働くことは毎日世界を知ることの連続です。いろいろな人から話を聞いたり、いろいろなものを見たり読むだけでも、私にとっては新しい発見がいっぱいです。また、同時に、これまでいかに自分が何も知らなかったかということに驚かされます。

そして、ユニセフでさまざまな国の人と一緒に働くことは、世界を知ることでもあり、楽しいことでもあるのですが、ときには衝突したり、面倒なことが起きたりすることがあります。そういうことが起きていくときは、なかなか楽しいとは思えないのですが、なんでも話し合いをしていくうちに、自分のいたいことが伝わり、相手の考え方も理解できてきて、コミュニケーションが取れたという達成感のようなものがわくときがあります。こういうときは、大変だなあと思いつつ、じわじわと楽しいなあと思えてきます。

またユニセフで働いていると、貧困、病気、死や紛争など、人間をやめなくなるような場面にも出会うことがあるのですが、そういうときは私たちの生きている世界がいかに完璧でないかということをおもひながら実感し、そしてそういう社会で何ができるかということをおもひながら人と一緒に考えていくことができます。

こうして考えてみると、やはりユニセフで働くことは、私の人生にとっても大きな影響があるんだなあ、と思います。

ユニセフ職員として働くことになったきっかけは何ですか? (奥村 久美子 15歳)

直接のきっかけは、国連ボランティアをやった後にユニセフでこれからは働くという人が大学院にいて、いつも現場でおもしろい話やきり話を聞いているうちに、私もやってみたいなあと思うようになりました。

学生のうちに何かしておくといいたいことなどはありますか? (今関 美都 13歳)

私の場合、中学・高校生時代は、勉強はしませんでした。自分の好きなことは好きだけやると決めていたので、今でもそのときに生まれた好奇心のようなものが自分の中心にあるように思います。その好奇心があるので、いろいろなところに行って、新しい環境に適応することができるのではないかと思います。中学・高校生時代は、そのあとの人生を楽しむための感性をみがくことができるものや出来事にできるだけ触れるべきだと思いますが、どんなことでみがかれていくかは人によるかなあとも思います。

社会の教科書に「地雷のある地域」として、中東諸国の名がたくさん出てきます。地雷による被害はどのくらいあるのでしょうか? (鈴木 智瑛 15歳)

2002年の地雷による中東での被害は、アルジェリア、エジプト、イラク、イエメン、ヨルダン、クウェート、レバノン、シリア、チュニジア、パレスチナで報告されています。

イラク北部では、地雷による被害は2001年には360人報告されていますが、2002年には457人に増えました。そして、この数は今年のイラク戦争後にさらに増え、2003年の5月には、北部だけで493人の被害がありました。内戦の終結したレバノンでは、地雷による事故はヘリつあり、2002年には42人と報告されています(ちなみに2000年には

兼光さんが担当する地域をみてみよう!



ユニセフの地域事務所は、現在世界の8カ所にあります。そのうちのひとつ、兼光さんのいるユニセフ中東・北アフリカ地域事務所では、中東と北アフリカ諸国20カ国全体の状況をみたり、地域のなかにあるユニセフ現地事務所との連絡やとりまとめなどを行っています。どんな国があるのか、地図で確認してみましょう。

20カ国もあるんだねー

かね みつ 兼光さんへ こんな質問があったよ!

こんにちは。ネットワー
カーの中津川です。メーリングリ
ストでのやりとりをまとめました。
兼光さんのお仕事や中東の文化に
ついてなど、いろいろな質問や
意見がありました!



113人でした。
これらの統計には、地元の人に加え、地雷除去などの仕事を行っ
ている間に事故にあった人たちの数もふくまれています。

地雷に対するユニセフの中東での取り組みは、地雷の危険性を
知ってもらうための教育活動が中心です。今年の3月にイラク戦争
が始まる前から、大規模な地雷教育活動を行い、地雷の危険性や、
地雷地帯に入ってしまったときの対処のしかたをアラビア語で書いた
パンフレットなどを各地で配布しました。また、イスラエルと国境を
接している南部シバタンでは、2002年の5月から2003年の6月ま
で、地雷教育活動を行い、18万人の学生のうち9万5千人が指導
を受けました。パレスチナでも同じような教育活動が現在も行われて
います。

しかし、地雷撤去条約を批准した中東の国は、アルジェリア、ヨ
ルダン、カタール、チュニジア、イエメンの5カ国のみで、世界の地
雷生産国15カ国のうち3カ国(エジプト、イラク、イラン)が中東に
あります。地雷を撤去する数よりも地雷を埋める数のほうが多いの
が現状です。

Q 今年の8月に起こったイラクの国連本部攻撃によって、ユ
ニセフはどのような影響を受けたのでしょうか?イラク
での活動や、今後の計画はどうなっているのですか?
(鈴木 智瑛 15歳)

A イラクの国連本部攻撃の影響はユニセフにとって、とても大き
いです。ひとつには、デモ国連事務総長特別代表とともにユ
ニセフの職員で私たちの同僚も亡くなってしまったので、スタッフの
ショックがとても大きいということです。そして、この攻撃をきっかけ
に、スタッフの安全を確保するために隣国のヨルダンに外国人ス
タッフ全員が避難するという状態になってしまいました。現在は、ヨ
ルダンから短期でイラクへスタッフが行くという形で活動が続けられ
ています。活動の内容は、医療、水、食料の配給です。そういった努力
もあって、電気、水などの最低限の生活は、2ヵ月前より改善さ
れてきています。しかし、治安のほうは全く回復していません。10
月23日の報告では、駐留軍への攻撃が10月に入ってとくに増え、
日に20人から30人の兵士が攻撃されているとのこと。報道で
は、駐留軍への攻撃数は倍増していることがわかります。



町のいたるところに、イラク戦争の傷あとが
見られる。©日本ユニセフ協会/K.Shindo

Q 「いろいろなメディアを通じて開発途上国とか難民キャン
プについての情報が流れているけれど、足りないものは
「におい」だ」という話を聞いたことがあります。開発途
上国や、内戦の激しい地域は、どのようなにおいがする
のでしょうか? (田淵 紗和子 15歳)

A おもしろい質問だなあと思いましたが、いざ答えようすると、
とてもむずかしい質問ですね。
たぶん、メディアに足りない「におい」というのは、「現実感に欠

ける」ということではないかなあと考えました。確かにこの戦争に関
する報道をみていると、報道規制もあるため、衝撃的な映像も少
ないし、視聴者にとって現実味のあるものは少ないと思います。

私がヨルダンに来て驚いたことのひとつに、アラブの放送局がパ
レスチナ難民キャンプの虐殺をなまなく報道することで、気分
が悪くなってしまうような場面を、数時間流し続けるのは本当に
びっくりしました。

しかし、そのような衝撃的な映像をみても、やはり「におい」は伝
わってきませんでした。衝撃的なあとは思いましたが、その場にい
たわけではないし、家族を殺されてすりすりついてくる人が周りに
いるわけではないし、もちろん死体のにおいが鼻に残るということも
なくて、テレビを消し終わったら、普通に自分の生活に戻るの簡単
でした。

こういふことから、私は映像を通して情報を知ることはできるけ
れど、メディアが本当の「におい」を伝えるには限界があるのではな
いかと思っています。「におい」はそこにいると感じた人しかわからない
のではないのでしょうか。

そして、「におい」は感覚的なもので、その「におい」に慣れ
ていない人がかくと、くさいと思う「におい」でも、慣れた人には良い
「におい」かもしれません。今、こちらではラマダン(注1)が始まり、日中、
イフターと呼ばれる晩餐の準備をする「におい」がするのですが、
最初こちらに来たころはくさいなあと思っていた羊の肉のあぶらの
においが、とてもおいしそうなの「におい」に思えるようになりました。

正直にいうと、こちらに来たころは、ラマダンといえ断食をす
る変わった習慣だと感じていたのですが、いろいろな人と知り合
いになり、イフターに招待してもらったりしているうちに、羊のあぶ
らの「におい」をかくと、食事を囲心なアラブの家族の顔
が浮かぶようになっていきました。

注1) ラマダン…「断食月」という意味。イスラム教の暦が決められた月に、信者の
人たちは1ヵ月間断食をする。ただし、日がずれば、食べた回数だけ取りか
かるといわれています。

Q 日本との文化や習慣の違いに驚いたことなどありますか?
(鈴木 智瑛 15歳)

A アラブにあるたいていの国のオフィスアワーは、朝8時から
夕方3時半までです。お昼休みはありません。みんな夕方3時
半になるといそいそと家に帰り、4時ごろ家族団らんで昼食を取りま
す。そのあとは話をしたりテレビをみたり、8時ごろ夕食をとったり、
ゆっくりと時間を過ごす人が多くいます。家族とても大切にす
る文化なのです。3時半までにはこのオフィスも閉まってしまうので、
重要なことは朝のうちにやってしまう習慣がきました。

日本では朝8時から夜8時まで働くのは普通のことなので、こちら
に来た人は、たいていびっくりしています。そしてよく「日本とアラ
ブの国に、どっちが本当は量かなかわからない」といっています。
また、アラブの国に週末は、たいてい金曜日と土曜日です。
イエメンなどは木曜日と金曜日が週末だそうです。ヨルダンは週
の初めが日曜日なので(つまり金・土が週末です)、日曜日からは働き始め
るというのになかなか慣れませんでした。

Q イスラム教では、男性がモスクに行って祈りをします。
さらに、一生に1度はメッカに行くといわれています。女性は、
どこで祈りをしているのですか?(今関 美都 13歳)

A モスクに礼拝に行くことですが、実は女性も男性も行きます。
私の女性の同僚によると、ヨルダンでは、平日は男性でもあま

り行かない。女性はぜんぜん行かない、とのこと。みんな仕事がある
のでなかなかモスクまで1日5回も行けないようです。男性はタクシ
ードライバーなど自由がきく職業の人がモスクへ行くと言っていました。
うちの事務所でもそうですが、みんな事務所にあるお祈り用の部屋で
祈っています。しかし、週末はたいがいの男性がモスクへ行く。女性
でも行く人は行くとのこと。女性がモスクへ行かない理由は、子ども
がいたり、家事があるので、家のほうがつろいでお祈りができると
のこと、モスクへ行けないことに不満はないようです。

女性もメッカに行きます。メッカへの巡礼(注2)には、ハッジ(大巡
礼)とアムラ(小巡礼)というのがあり、ハッジは、一生に1回行う
もの、アムラは何回でも行けるということです。例えば、その同僚の
女性は3年ほど前にハッジでメッカに行ったのですが、もし行きたけ
れば再度アムラでメッカに行くことができるとのことです。

メッカに行くと帰ってきた人に会うと、みんなははれとした顔に
なっています。女性はメッカに行ったのちにベールをかぶりだす人が
います。どんな感じかと聞くとみんな生まれ変わったような感じがす
るといっています。

イスラム教という男女をわける教えのように思いますが、イス
ラム教徒であれば男でも女でも「五行」(祈り、断食、巡礼、喜捨(注3)、
信仰)をしなければならず、神の前では人間はみな平等ということで、
ハッジの行われる10日間は男女関係なくとも生活をた、という
ことを同僚の女性が言っていました。

注2) 巡礼…宗教の聖地へお祈りに出かけること
注3) 喜捨…めぐめきれない人たちやお寺などに、すずんで寄付をすること

Q 日本に生まれて、今まで平和に過ごしてきた私たちにでき
ることってなんだと思いますか?また兼光さんは、私たち
に何を知ってほしいですか? (藤原 美典 17歳)

A 「自分たちに何ができるのか」ということですが、私は海外の
問題と比べると、突きつめること国内の問題だと思っています。
自分の国が問題をかかっているのに、どうやって他の国を助けるこ
とができるのでしょうか?他の国のためになることをしようと思うと、
自国が良い政策をしていないと無理だと思います。わかりやすい例だ
と、自国が排気ガスをどんどん出すような環境政策をとっているよう
では、他の国の環境保護なんか絶対できません。

と、いうことで、もう一度自分たちのまわりの政治、社会問題を考
えてみることでいいのでしょうか。みんな考えて、話し合う文化を
まわりにつけていく。解決策があればそれに取り組んでみる。とても
地味でかっこよく聞こえないかもしれませんが、私はこれをオススメ
します。

そして、もうひとつは、1人本当の外国人の友だちを持つ、とい
うこともオススメです。1人本当の外国人の友だちがいて、その人の
ことやその人の国や文化のことを理解するだけで立派な国際理解だ
と思いますが、どうでしょうか。

最後に兼光さんからみなさんへ

みなさん、どうもありがとうございました。むずかしい質問がきつ
ぎと送られてくるので、頭を悩ませましたが、とても楽しかったです。
毎日たくさんペーパーワークがあったり、数字ばかり追っていたりす
るんですが、みなさんとメールで意見交換できてどういう人たち
がユニセフを支援してくれているか実感することができました。

みなさんも勉強やスポーツやデート(?)に忙しいと思いますが、今
を大切にいろんな経験を楽しんでくださいね。それでは!



兼光さん、お忙しいところをていねいに答
えてくださって、本当にありがとうございます。
「世界を知り、楽しむこと」という、兼光
さんのポジティブで明るいこの言葉が、心に
残りました。望みを捨てず、つねに向上心
をもって、世界を知り、楽しむながら、世界
の国に人の心と一緒にならなるとも命を救え
るような人間になりたいと思いました。兼光
さん、マー アッサラマ(さようなら)!(
鈴木 智瑛 15歳)

みなさんの質問や感想を見て、とてもすばらし
いと思いました。あるセミナーでアフリカ人の先生
が「Africa is a Colorful World」といったことを
思い出しました。いつか世界が、こわいイメージなど
誰も持たない、平和で明るい「Colorful World」
になるように、わたしたちは努力をしていきたいと思います。
「自分に向かえるか」をつねに考えて行動して
いければ道は開けると思っています。わたしたちはこれか
ら兼光さんに教わったことをもとに、活動を続け
ていきたいと思います。(中津川 有紀 17歳)

かねみつ てがみ 書こう!
兼光さんにお手紙を書こう!
今回のメーリングリストでのイン
タビューはいかがでしたか?きつと
いろいろなことを感じたと思います。
そこで、兼光さんへみなさんの感想
を送ってみませんか?もっと知りた
いなあと思うことや、わからないこ
とでもかまいません。郵送または、
ファックスやメールでユニセフ手ど
もネット事務局までお送りください。

REPORT 報告とお知らせ

INFORMATION

お問い合わせもうしこみは
ユニセフ子どもネット事務局
 (日本ユニセフ協会 広報室内)
 住所: 〒108-8607 東京都港区高輪4-6-12
 電話: 03-5789-2016
 ファックス: 03-5789-2036
 電子メール: jcuinfo@unicef.or.jp

お知らせ Information

新着資料 「ユニセフ年次報告」のお知らせ!

ユニセフ本部が毎年発行している「ユニセフ年次報告」の日本語版が、今年もできあがりました。2002年の1月から12月までのあいだ、ユニセフが現地でどのような活動をしてきたかを報告している資料です。おとな向けに作られた資料なので、難しいかもしれませんが、もっとユニセフの活動をくわしく知りたい人はぜひ読んでみてください。ひとり1冊まで送料をふくめ無料でお送りしています。希望する人は、ユニセフ子どもネット事務局までご連絡ください。



DVD + BOOK ビデオ 「ようこそボクらの学校へ」

日本ユニセフ協会が制作に協力したDVD+BOOK「ようこそボクらの学校へ」が、11月25日に発売されました。ジャーナリストの後藤 健二さんが、アフガニスタン、イラク、シエラレオネなどの、困難な状況にある子どもたち取材し、「学校」という場を通して、未来へ生きる希望をもってゆくというストーリーを映像でお伝えします。また、現地で子どもたちを支援しているユニセフの活動もたくさん紹介されています。



DVD + BOOK 「ようこそボクらの学校へ」
 ・DVD (全8話 89分) + 解説本 (64ページ カラー) 3800円
 ・ビデオ (全6話 68分) 4000円 ビデオには解説本が付きません
 ※価格はすべて税別です
 著者: 後藤 健二 (インデペンデント・プレス)
 発行: NHK出版 (日本放送出版協会)
 お問い合わせ: 全国の書店またはNHK出版販売部 03-3780-3339

映画 「イン・ディス・ワールド」 全国で公開!

日本ユニセフ協会が推薦する映画「イン・ディス・ワールド」が、11月15日より公開されています。パキスタンの難民キャンプで育ったアフガン人の少年ジャマルとエナヤットの亡命の旅をおして、「亡命」「移民」「難民」という問題を描いた作品として評価されています。2002年のベルリン映画祭では、グランプリ(金熊賞)を受賞しました。実際に主役を演じている二人もベジャワール難民キャンプで生まれ育った子どもたちです。東京、名古屋や大阪など、全国各地で公開されます。くわしい内容や、上映する劇場については、ホームページwww.inthisworld.jpへ。



試写会に行ってきました!
 10月30日に東京の渋谷にあるUNハウス(国連大学本部ビル)にて、中学生から大学生までを対象とした試写会が開催されました。3人のユニセフ子どもネットワークが参加してくれました。

この映画をみて最初に感じたことは、私と同じくらいの年齢の子どもたちが、私よりもずっと過酷な運命をせおって生きているということについての驚きです。私は何も考えず、毎日平凡に暮らしています。そんな自分を恥ずかしく思います。また、その困難に立ちむかう勇氣を持っているジャマル君を、とてもうらやましく思いました。

私たちは、食べるものもじゅうぶんあって、学校に通って、とても平和な世界に生きています。でも私は本当に幸せなのですか?何かたりないものがあります。平和であるということは、ただ自分が平和なところに生まれて育っただけで、自分で発見したり、努力したりして得ているものではないと思います。人からもらったものを「幸せ」と考えていいのでしょうか。ジャマル君のような難民の人たちは、「幸せ」というものをどのように感じているのでしょうか。とても考えさせられました。この映画をみることで、良かったと思います。(土屋 朋子 16歳)

報告 Report

ユニセフ子どもネット@関東・有志学習会報告 「子どもの権利」～知ろう!学ぼう!考えよう!～

11月9日ユニセフハウスで、ユニセフ子どもネット@関東・有志学習会が開かれました。内田 沙希さん、奥村 久実子さんをはじめ、関東に住むネットワークの有志が、子どもの権利を知り、学び、考えるということを目的に企画したワークショップで、15人が参加してくれました。

当日は、まず私たちに「子どもの権利」があると思うか、みんなで考えました。そしてビデオを見て、感想を話しあいながら世界からなくしたものを書き出しました。それらをなくすために政府にやってもらいたいこと、また自分たちにできることを考えました。学習会に参加した今蘭さんの感想をご紹介します。



会場の様子!でした ©日本ユニセフ協会

「子どもの権利」についてのビデオはとても衝撃的でした。子どもたちが座ってはたおりとかマッチの選別などの仕事をしていたのです。子どもの指は細くて、そういう仕事に向いているのだとか。1本目のビデオの中の子どもたちは、権利が守られてとても幸せそうだったというのに。

やはり世界には、暗い現実が数多くあります。でも、そういったことから、目を離してはいけないと思います。私はビデオのナレーションで言われて初めて、気付いたことがあります。自分が「難民」について見聞きすることに、慣れてしまっていたということです。とても心がいたみました。

みんなでの話し合いのとき、募金の使いみちのことで、例えば政治家に会って話しに行くなど、私がかんがえてきたことがないアイデアが参加者からいろいろ出て、とても新鮮でした。このようなかたちで話し合う機会を、また作ってほしいと思います。

今回のワークショップは、参加人数がそれほど多くありませんでしたが、それがあってアットホームな話し合いに結びつき、良かった面もあったと思います。このワークショップで権利について、前よりももっと深く知り、考えることができてよかったです。

まわりの人にも、人権をもっと知ってもらいたいですね。そして、行動するためには、さらに多くの人数が必要かもしれません。これからも、日常生活のなかで、小さなことから世界をよくする努力をしていこう、とあらためて思いました。(今蘭 美都 13歳)

学習会で出た意見などくわしい内容は、ホームページに掲載しています。
 ユニセフ子どもネットホームページ <http://www.unicef.or.jp/kodomo/net/net.htm>

LETTERS ユニセフ子どもネットニュース NO.6を読んで ネットワーカーからの感想

- 前号では、イラク戦争についてみなさんの意見を紹介しました。また特集では、夏に開かれた「ユニセフ子どもセミナー2003」の報告や、アフリカで起こっていることについて取りあげました。
- ポリオやマラリアになることも一人でもたすかってほしいです。ハンフォードちゃんも、リッパな歌手になれたらいいのなあと思いました。そして、なによりも戦争はかわいそうではすまないのだと思いました。(渡辺 麗 10歳)
- 今回第6号を読んで、日本は本当に幸せな国だと思いました。幸せすぎて、世界の国ぐにで起こっている危機にも全く興味がなくなっているのではないのでしょうか?もっと世界中が平和になるためには、世界中の人びとが本当の幸せを願い、積極的に行動することが大事だと思います。時間がかかることだけれど、そこから始めないと何も変わらないと思います。(野村 春央里 14歳)
- 戦争が続いているので、悲しくなりました。でも、ユニセフの支援が子どもたちに届いて、子どもたちが喜んでくれていると知って少し安心しました。これから、もっとたくさんの人びとに平和で幸せな生活を送ってもらいたいです。(川口 奈々 13歳)
- イラクの国連本部爆発テロについての記事を読んで、人間は昔から、平和と豊かな生活を追い求めているのに、時だけが過ぎてゆき、とり残されたり逆行しているところもあると感じました。平和は願うだけでは手に入らない、勝ち取らなくてはいけないのだと強く心に思いました。(須藤 紗織 17歳)
- セミナーの様子や内容を見て、参加できたよかったです。悔やみません。「国内行動計画」は子どもたちのためのものならば、子どもたちの意見を聞き上げなければ十分なものにはなりません。小さな声が大きな声につながり、世界中の人びとと協力できたらと思う。日本も本当の「国内行動計画」をして欲しいです。(熊谷 真純 15歳)
- 日本では、昔のもの、あまり使わないものという印象がある数帳で、30秒に1人という割合で命を失っている子どもたちを救えるなんて、すごいと思いました。日本などの進んだ技術を持ちこめば、もっとたくさん命を救えるのではないかと思います。(山本 春奈 11歳)